

シャンプー

蜜瀬かえで 著

いつもの教室。

いつものお昼休み。

ただ、いつもと違って、今日はのんちゃんが部活のミーティングで、かおりはクラス委員の集まり。

だから、わたしと玉置、二人きりのお昼ご飯。

今月もまた金欠の玉置は、購買のコッペパン一個だけで、しょうがなくまたわたしのおかずを分けてあげたりしていたら、

「未佑、もしかしてシャンプー変えた？」

「あ、わかった？」

卵焼きを差し出そうと身を乗り出したタイミングで、玉置が気がついた。

うちはわたしもお母さんも髪が長くてよく使うから、普段使ってるシャンプーも、リンスのいらないドラッグストアで一番安いヤツ。

なんだけど。

「えへへ。実は昨日、ちよつと良いシャンプーが在庫処分

で安くなったの」

しかもお試し用でリンスとセットのやつ。

「なんかイチゴのすんごくいい匂いがする」

「でしょ」

いい匂いって言われたのもうれしかったけど。

わたしが言う前に気づいてくれたことのほうがもっとうれしくって、

「卵焼き、もう一個食べる？」

「うん！」

この場にかおりがいたら、また「甘やかしすぎ」なんて、しかられそうなんだけど。

つつい、いつもより多めにおかずをわけてあげてしまったりして。

「ごちそうさま」

気づいたら、またほとんどお弁当、玉置に食べられちゃったり。

……まあ、いいや。

かおりものんちゃんも、わたしが言うまで気づいてくれなかったのを、玉置はすぐに気がついてくれたし。

しかも、それを『いい』って言ってくれたんだもん。

だから、わたしとしてはもう大満足なわけで――、

「あー。あたし、今、すごくイチゴ食べたい気分！」

——ガクッ。

その一言で折角のいい気分が全部台無し。

「あれ、どうしたの未佑？」

「……たーまーき」

「え？ え？ ええ！？」

本当にわかってなさそうな玉置に、

（……どうしてそっちには気づくの、こっちには気が利かないかなー）

\*\*\*

お昼休みの残り時間。

シャーペン芯を切らしていたことを思い出し、急いで  
購買までやってきた。

うちの学校、さすがお嬢様も通う私立だけあって、購買  
のラインナップも充実している。

しかも、文房具とか一割引で買えちゃったりするから懐  
にも優しいし。

目的の商品を手にとって、レジに並ぼうとしたあたりで、

「……あ」

お菓子コーナーで『あるもの』を見つけた。

「うーん」

と一回考えて。

おサイフの中身を確認。

「……まあ、いいか」

わたしそれを手にとって、レジへと向かった。

\*\*\*

今日は部活もない日で、HRが終わると同時に玉置が迎  
えに来て、そのまま一緒に下校する流れ。

とはいえ、帰る方向は正反対だから、一緒に帰れるのは  
正門までなんだけど。

「ねえ、未佑。今日さ、どっか寄ってかない？」

「何言ってるの。また今月もほとんど残ってないって言っ

てたじゃない」

「……う。そうだった」

節約とか言う言葉とは無縁の玉置は、両親からの仕送りが入ると、すぐ服とかアクセサリーに使っちゃって。

ただでさえ、画材でお金のかかる美術科だつていうのに。

「また今度ね。今日はわたしもスーパーの特売日だし」

わたしも家に帰って荷物を置いたらすぐに向かわなきゃいけない。

今日とはとにかく菓物が安いの！

「あーあ、今日はものすんごくイチゴな気分なんだけどな」

……玉置つてば、まだ言ってるし。

でも、それで思い出した。

「玉置」

「ん？」

わたしは鞆を開いて、お昼に購買で買っておいたものを取り出す。

「あっ！ イチゴ！」

「キャンディーだけどね」

イチゴミルクキャンディー。

玉置があまりにイチゴイチゴ言うものだから、わたしも

でなんか食べたくなっちゃってしまつて。購買で見かけておもわず買ってしまったのだ。

小袋を切つて、中身を取り出し、

「はい、あーん」

「あーん」

玉置の口に放り込んでやると、

「うーん。イチゴ」

「もー、なにそれ」

苦笑しつつ、わたしも一個口の中に。

途端、広がる甘つたるいイチゴの風味。

しかも、

（この味、あのシャンプーの香りに近いかも）

思ったことは玉置も同じらしくて。

「これ、未佑の髪の毛」

「その言い方はやめて」

「いいじゃん。あたしはこの甘つたるい感じ好き」

「……もう」

そんなふうに言われたら、怒るに怒れないじゃない。

「もう一個っ」

「え、もう食べちゃったの？」

「うん」

「……しようないわね」

結局、正門までの間に3つも平らげた玉置でした。

衣替えが終わったばかりの初夏の日のこと。

\*\*\*

ちなみに、玉置の髪はわたしよりもずっと長くて腰のあたりまであるんだけど、

「シャンプーとか、何使ってるの？」

「あたし？ あたしは前からずっと同じヤツ。うちの母さん、それしか買ってこなかったから。今でもそれ使ってる」

「へー。何て名前のやつ？」

「何てたっけかなあ？ あの、赤いボトルに入った、花の名前の……」

「あー。うん、それでわかった」

ドラマ見てたらよくCMでやってるやつだ。

「あたし、髪長いからさ、すぐに切れて買いに行かないと

いけなくて、困るんだよねえ」

……それはしょうがないよ、玉置。

すぐになくなってもしょうがないよ。

……お金。

そのシャンプー、わたしが普段使ってるのより、三倍くらいするやつだよ？

いつもツヤツヤな玉置の明るい色の髪を見て、言いたいことを飲み込む代わりに、ため息を一つついたわたしでした。